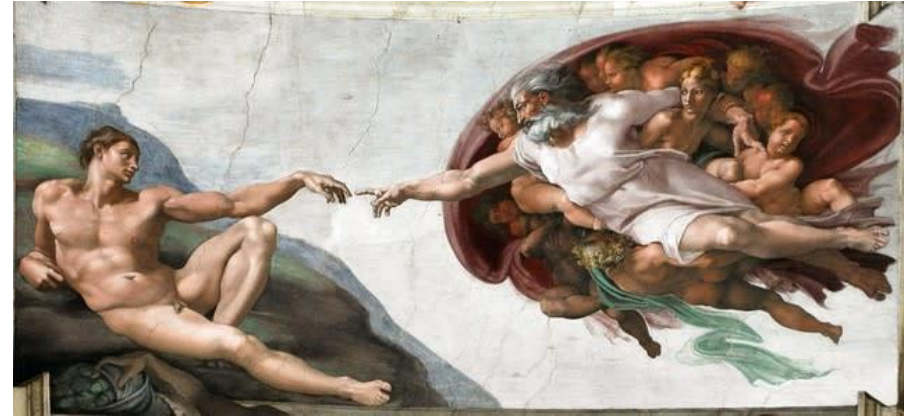


## 創世記・出エジプト記 通読

1月



(1月30日)「創世記8:1~5」

神は、ノアと彼と共に箱舟にいたすべての獣とすべての家畜を御心に留め、  
地の上に風を吹かせられたので、水が減り始めた。(創世記8章1節)

・神さまは、箱舟の中にいたノアや動物たちを忘れることはありませんでした。神さまが送られた風は、地上の水の勢いを収めます。聖書の中で、風は「霊」と同じ言葉です。「神の霊が水の面を動いていた」という1章2節の記述が思い起こされます。

・5か月経ってようやく水は引いていき、箱舟はアララト山の上にとどまります。トルコ共和国の東に標高5,137mの「アララト山」がありますが、12世紀以降、これはきっと聖書の山に違いないと考えた欧州人が、そのように命名したそうです。

・その後2か月半ほどかけて、ようやく山々の頂があらわれます。水が引くのにそれだけたくさんの時間を要したということは、神さまの怒りがそれほど大きかったということを示しているようです。

(1月31日)「創世記8:6~14」

鳩は夕方になってノアのもとに帰って来た。見よ、鳩はくちばしにオリーブの葉をくわえていた。ノアは水が地上からひいたことを知った。

(創世記8章11節)

・ノアは地が渴いたかどうかを確かめるために、鳥を放ちます。ところが鳥は乾いた所がなかったので、行ったり来たりします。鳩を放しても、すぐに戻ってきました。しかし7日後に再び鳩を放つと、鳩はオリーブの葉を加えて戻ってきたそうです。

・奈良基督教会の大きな瓦(いわゆる鬼瓦)には、鳩とオリーブが刻まれています。鳩とオリーブは洪水が終わった平安のしるしです。礼拝堂という箱舟から外に出る時に、わたしたちには平安が約束されていることを心に留めましょう。

・さらに7日後に鳩を放すと、もう箱舟には戻って来ませんでした。乾いた地を見つけたのでしょう。ようやくノアたちは、地上に戻る事ができます。

(1月1日)「創世記1:1~5」

神は言われた。「光あれ。」こうして、光があった。

(創世記1章3節)

・聖書は、創世記からスタートします。そしてその最初には、天地創造の物語が載せられています。神さまがどのように世界をつくられたのかが書かれているのですが、これは科学的・歴史的な出来事というよりも、神さまが人間とどのように関わろうとされているのかということでしょう。

・神さまは最初に、「光あれ」と言われました。「無」から何かをつくられたのではなく、混沌とした地の闇の中に、光をつくられたのです。太陽や月がつくられるのは、これよりも後のことです。ということは、この光は日光などではなく、神さまからの光ということです。

・「夕べがあり、朝があった」と書いてある通り、ユダヤでは一日の始まりは日没です。暗闇を経て、朝が訪れる。それも神さまの光がわたしたちを包み込むのだということを、心に覚えましょう。その光を、神さまは良しとされるのです。

(1月 2日)「創世記1:6~13」

**地は草を芽生えさせ、それぞれの種を持つ草と、それぞれの種を持つ実をつける木を芽生えさせた。神はこれを見て、良しとされた。**

(創世記1章12節)

- ・二日目に神さまは、水と水とを分けられました。当時の世界観では陸地は海で囲まれ、またその下には水があると考えられていました。また天には透明のドームのような覆いがあり、その上にも水があったとされています。
- ・そして大空の上にある水が、たまに雨になって落ちてくると考えられていたようです。さらにその上に神さまがおられるという信仰から、「天におられるわたしたちの父よ」という祈りの言葉も出来てきたのかもしれない。
- ・三日目には、神さまは地と海を分け、草木や植物を生じさせます。植物は生物が生きるのに必要な酸素を生成してくれます。神さまはわたしたちが生きると、植物をつくられました。地球環境を大切にすること、神さまの思いを大事にすることなのです。

(1月 3日)「創世記1:14~19」

**神は二つの大きな光る物と星を造り、大きな方に昼を治めさせ、小さな方に夜を治めさせられた。**

(創世記1章16節)

- ・古代ギリシアがそうであったように、太陽や月を神格化して崇拝する宗教は多く存在します。占星術や星占いなど、天体の動きを見て自分の運命や未来を予想することは、現代社会の中でもみられることです。
- ・四日目に神さまがつくられたのは、「二つの大きな光るもの」でした。昼と夜をそれぞれ治めるものとしてつくられていますから、これらは太陽と月のことでしょう。しかし聖書は、それらはあくまで「被造物」だということを強調するのです。
- ・太陽や月、星たちを拝むことはないのです。またそれらのものが、人の運命を変えることもないのです。ちなみに新共同訳聖書では東方からイエス様を拝みに来たのは「占星術の学者」だと訳されていましたが、新しい聖書では「博士」に戻っていました。よかったです。

(1月 28日)「創世記7:11~16」

**神が命じられたとおりに、すべて肉なるものの雄と雌とが来た。主は、ノアの後ろで戸を閉ざされた。**

(創世記7章16節)

- ・洪水は激しさを増します。「大いなる深淵の源がことごとく裂け、天の窓が開かれた」と書かれていますが、ブルーシートを張っているところに雨水がたまり、それが一気に張り裂けたということが世界中で同時に起こったようなものではないでしょうか。
- ・かなりわかりにくいたとえになってしまいましたが、とにかく経験したことのないような豪雨が40日40夜続いたということです。そしてそのときに、箱舟の後ろの戸を閉じられたのは神さまでした。
- ・神さまが戸を閉じられたということ、それは箱舟の中の命は神さまが支配するということです。支配というときつい表現に聞こえますが、聖書では「守る」、「正しく管理する」という意味です。創世記1章28節の「人間が動物を支配する」と同じことです。

(1月 29日)「創世記7:17~24」

**地の面にいた生き物はすべて、人をはじめ、家畜、這うもの、空の鳥に至るまでぬぐい去られた。彼らは大地からぬぐい去られ、ノアと、彼と共に箱舟にいたものだけが残った。**

(創世記7章23節)

- ・洪水は40日間、地上で続きます。40という数字は聖書にたびたび登場します。出エジプトの際、イスラエルの民が荒れ野でさまよったのは40年間でした。イエス様が荒れ野で悪魔の誘惑を受けたのは40日間でした。
- ・40には文字通りの意味だけではなく、「大変長い期間」という意味も持ちます。つまり途方もなく長い間雨が降り続け、一番高い山の15アンマ(6.75m)上まで、水で覆われたということです。
- ・その結果、鳥ですら羽を休める場所がないために息絶えていきました。水はさらに150日間、みなぎったままだったそうです。確かに蒸発する以外、水の行き場はありません。ノアたちはどのような思いで、一面の水を見ていたのでしょうか。

(1月 26日)「創世記7:1~5」

主はノアに言われた。「さあ、あなたとあなたの家族は皆、箱舟に入りなさい。この世代の中であなただけはわたしに従う人だと、わたしは認めている。」

(創世記7章1節)

- ・ノアの箱舟のアニメや映画では、ノアたち家族は決まって周りの住民から馬鹿にされます。「こんな大きな箱舟造ってどうするんだ」、「ここまで水につかるような雨なんて降るはずがない」。ノアはそのようなことを言う人々を、どんな目で見ていたのでしょうか。
- ・確かにノアは正しく、神さまに選ばれた人物です。しかし、周りの人たちが死んでしまってもいいと考えたのでしょうか。自分たちだけが助かればいい、その思いはあまりいいとは思えません。
- ・この箇所では神さまは、清い動物と空の鳥については箱舟に入る数を雄・雌7匹ずつに変更します。のちに清い動物と鳥はいけにえとして献げられるので、数を増やしたのかもしれませんが。

(1月 27日)「創世記7:6~10」

ノアが六百歳のとき、洪水が地上に起こり、水が地の上にみなぎった。

(創世記7章6節)

- ・ついに洪水が起こります。ノアはそのとき、600歳でした。さぞかし箱舟づくりはしんどかったことでしょう。さらに10節には、「七日たって、大洪水が地上に起こった」とあります。さらに大きな洪水がきたということでしょうか。
- ・ノアたち家族や動物、鳥などは急いで箱舟の中に入ります。ここでは清い動物も、雄と雌二匹ずつとなっています。様々な伝承をまとめていく中で、聖書の記述にも混乱が生じているように思えます。
- ・洪水で人々が滅ぼされる神話は、世界各地にあるそうです。ギリシア神話やギルガメシュ叙事詩、またヒンドゥー教などにも見られるそうですが、水に対する恐怖というものが共通してその根底にあるのでしょうか。

(1月 4日)「創世記1:20~25」

神はそれらのものを祝福して言われた。「産めよ、増えよ、海の水に満ちよ。鳥は地の上に増えよ。」

(創世記1章22節)

- ・神さまは五日目に魚や鳥を、そして六日目の前半に地上の生き物をつくられました。ただし聖書は「魚」とは書かず、「生き物が水の中に群がれ」と書いています。当時の人たちは、海の中に一体どんな生物がいるのかよく知らなかったのかもしれませんが。
- ・新共同訳聖書で「大きな怪物」と訳されている言葉は、新しい聖書では「大きな海の怪物」となっています。ヘブライ語で「タンニニム」というこの生物はヘビのような怪物で、後に退治されるとされます。後にも出てきますが、どうやらヘビは嫌われ者のようです。
- ・神さまは魚と鳥をつくられた後に、「産めよ、増えよ」と命じられます。この言葉は人をつくられた後にも言われますが、この神さまの思いをわたしたちも心に留めておきたいと思います。

(1月 5日)「創世記1:26~31」

神は御自分にかたどって人を創造された。神にかたどって創造された。男と女に創造された。

(創世記1章27節)

- ・六日目の後半、ついに神さまは人をつくられます。でも今日の箇所を読んで、「あれ？」と思わなかったのでしょうか。土の塵を粘土のようにこねたり、あばら骨をとったり、鼻に息を吹きかけることなく、「男と女に創造された」からです。
- ・現在の聖書学では、聖書は様々な資料を集めて編集されたと考えられています。そのため異なる形の創造物語が共存しているというのです。しかしここで大切なのはそのような「聖書の成り立ち」ではなく、聖書を通して神さまが伝えようとされていることです。
- ・「神にかたどって」という言葉が心に響きます。新しい聖書では、「自分のかたちに」となっています。わたしたちは神の似姿としてつくられました。そしてこの世界を管理する義務を与えられています。極めて良かった世界を、持続していきましょう。

(1月 6日)「創世記2:1~3」

**この日に神はすべての創造の仕事を離れ、安息なされたので、第七の日を神は祝福し、聖別された。**  
(創世記2章3節)

- ・福音書の中には、イエス様とユダヤ人指導者との間に起こった「安息日論争」が何度か記されています。この安息日は、神さまが天地創造の七日目にすべての創造の仕事を離れ、安息されたことに由来します。(十戒にもでてきますが)
- ・ユダヤ教では、安息日は土曜日です。それは安息日とは「第七の日」のことだからです。しかしキリスト教では、イエス様が復活された日曜日を「主の日(主日)」として礼拝しているため、「安息日だから礼拝している」というわけではありません。
- ・ただ、本来「神さまが休息なされた日だから、同じように休んで神さまに心を向けましょう」という恵みの日だった安息日は、「一切の労働を禁ずる」という禁止命令に変わっていきます。このことを神さまはどう感じておられるのでしょうか。

(1月 7日)「創世記2:4~9」

**主なる神は、土(アダマ)の塵で人(アダム)を形づくり、その鼻に命の息を吹き入れられた。人はこうして生きる者となった。**  
(創世記2章7節)

- ・ここから再び、人の創造物語に入ります。前にも書きましたが、聖書は複数の伝承を集めて編集されたと考えられており、1章の物語とは違った視点で神さまのみ業を感じることができます。
- ・聖書によると最初の人「アダム」とされますが、その名は土(アダマ)が語源となっています。埋葬式の式文の中に、「土を土に、灰を灰に、塵を塵に返し」という文言がありますが、その式をおこなうたびにこの箇所が思い起こされます。
- ・そして神さまは、人の鼻に命の息を吹き込まれます。こうして人は、生きる者とされます。原語では息は、霊や風と同じ言葉になっています。わたしたち一人ひとりにも神さまの霊が注ぎ込まれ、神さまによって生きる者とされているのです。

(1月 24日)「創世記6:11~17」

**見よ、わたしは地上に洪水をもたらし、命の霊をもつ、すべて肉なるものを天の下から滅ぼす。地上のすべてのものは息絶える。**  
(創世記6章17節)

- ・神さまは正しく、全き人であったノアに、地とすべての肉なる者を滅ぼすことを告げられます。人間だけではなく動物や鳥たちも含めて、「肉なる者」はすべて滅ぼすというのです。
- ・しかし、同時に神さまはノアに「箱舟づくり」を命じられます。アンマというのは長さの単位で、1アンマはひじから中指の先までの長さです。1アンマを約45cmと考えると、箱舟の大きさは、長さ135m、幅22.5m、高さ13.5mとなります。
- ・3階建ての巨大な箱舟を、ノアたちはどうやって造ったのでしょうか。また家族だけで造ることができたのでしょうか。箱舟には屋根と戸口はつけられませんが、オールや帆はつけられません。自力で動くことのできない、ただ漂うだけの舟なのです。

(1月 25日)「創世記6:18~22」

**ノアは、すべて神が命じられたとおりに果たした。**

(創世記6章22節)

- ・神さまはノアとの間に、契約を立てます。この契約が具体的に何かは書かれていません。ノアの家族、鳥、家畜、地を這うあらゆるものを二匹ずつ箱舟に入れなさい。わたしはそれらが生きられるようにするというのが「契約」なのでしょう。
- ・神さまはここで、「すべての者を滅ぼす」と言われたことを思い直したのでしょうか。ただしノアは人間の中で「正しい者」として選ばれましたが、動物たちはそうではなく、無造作に選ばれたようです。
- ・ノアは箱舟を造るのに、どれだけの期間働いたのでしょうか。また神さまに疑問を呈することはなかったのでしょうか。聖書はノア的心情には一切触れません。ただ神さまを信じ、その命令を守ったノアの行動だけが伝えられます。

(1月 22日)「創世記 6 : 1~4」

主は言われた。「わたしの霊は人の中に永久にとどまるべきではない。人は肉にすぎないのだから。」こうして、人の一生は百二十年となった。

(創世記 6 章 3 節)

・今日の箇所はあまりにも唐突過ぎて、意味を掴むのに時間がかかってしまいます。まず「神の子」という言葉が出てきますが、これはイエス様のことでなく、天使など「天的存在」のことではないかと思われまます。

・神さまは「天的存在」が人間の娘たちを妻とするのを見て、ご自分の霊が人の中に永久にとどまることを良しとはされませんでした。それまでも人の命には限りがありましたが、神さまはそれを「120 年」と定められました。

(その後アブラハムは 175 歳まで生きていますが)

・ここに出てくる勇士「ネフィリム」という名は、民数記 13 章 33 節にも登場します。イスラエルの人たちがカナンの地を偵察に行ったときに、そこにいた人たちを見て「我々が見たのは、ネフィリムなのだ」と恐れます。伝説の勇士なのでしょう。

(1月 23日)「創世記 6 : 5~10」

これはノアの物語である。その世代の中で、ノアは神に従う無垢な人であった。ノアは神と共に歩んだ。

(創世記 6 章 9 節)

・聖書はここから、「ノアの箱舟」の物語に入ります。神さまは地上に人の悪が増し、常に悪いことばかりを心に思い計っているのを御覧になって、地上に人を造ったことを後悔し、心を痛められました。

・この記述を読むと、今の世界を神さまはどのような目で見られるのだろうと心配になります。悪がはびこり、また自分自身の心も悪に傾いていることに気づかされることが多々あります。

・その中で神さまは、ノアに目を留められました。彼は神さまに従う無垢な人でした。新しい聖書では「正しく、かつ全き人」と訳されています。そのような人が一人でもいたことが、救いにつながっていきます。

(1月 8日)「創世記 2 : 10~17」

ただし、善悪の知識の木からは、決して食べてはならない。食べると必ず死んでしまう。」

(創世記 2 章 17 節)

・「エデンの園」はどこにあるのか。古くからそのことは議論され、様々な人が「楽園」を求めていきました。四つの川の名前からその場所を特定したり、産出される物から導き出してみたり。

・神さまは人を、エデンの園に住まわせます。そこを耕し、守らせるためです。ただし食べるのに良さそうな果実がふんだんに生えていたので、過酷な労働などは必要なかったでしょう。神さまは人に、「良い場所」をお与えくださったのです。

・ただし神さまは、一つだけしてはならないことを伝えられました。善悪の知識の木からだけは、食べてはならないのです。命の木からはいいのか？という疑問も残りますが、ここで覚えておきたいのは神さまが命じられたとき、まだ人は一人だけであったということです。

(1月 9日)「創世記 2 : 18~25」

主なる神は言われた。「人が独りでいるのは良くない。彼に合う助ける者を造ろう。」

(創世記 2 章 18 節)

・神さまは人に、「助ける者」を与えようとされます。ただしこの「助ける者」とは、助手や召使い、奴隷などではなく、「お互いに助け合う対等な関係」を示しているようです。神さまはそのような存在を、まず家畜、空の鳥、野の獣の中に見出そうとされます。

・しかしその中に、ふさわしい助け手は見つけられませんでした。そこで神さまは人を眠らせ、あばら骨を一本取り、「女」をつくり上げます。ただしこれは、「男」の優位性を示しているではありません。

・聖婚式の中に、「誓約」(祈禱書 309 頁)というところがあります。この中で夫も妻も、「あなたを愛し、あなたを敬い、あなたに仕え、あなたとともに生涯を送ります」と同じ言葉で約束します。「二人が一体なので、二人はお互いに助け手となる」、それが大事なのです。

(1月 10日)「創世記 3 : 1~7」

女が見ると、その木はいかにもおいしそうで、目を引き付け、賢くなるように唆していた。女は実を取って食べ、一緒にいた男にも渡したので、彼も食べた。  
(創世記 3 章 6 節)

・今日の箇所は、アダム(男)とエバ(女) (まだ聖書では名前が付けられていませんが、わかりやすいようにこう呼びます) が、蛇にそそのかされて善悪の知識の木から実を食べてしまう、という有名な物語です。

・ヘビがエバに話しかけたときに、アダムはどこにいたのでしょうか。聖書を読むと、どうも一緒にいたようです。だとすれば、ヘビがエバに語りかけているときに、アダムはなぜ止めなかったのでしょうか。黙って様子をうかがっていたようにしか思えません。

・神さまは、その実を食べると「死ぬことになる」と言われました。アダムは本当にそうなるのか、エバの様子を観察していたのでしょうか。実を食べた瞬間に死が訪れることはありませんでしたが、結果的に彼らはエデンの園を追われることとなります。

(1月 11日)「創世記 3 : 8~13」

アダムは答えた。「あなたがわたしと共にいるようにしてくださった女が、木から取って与えたので、食べました。」  
(創世記 3 章 12 節)

・神さまは園の木の間に隠れていたアダムたちに声を掛けます。「どこにいるのか」と。その後、「誰が告げたのか」、「食べたのか」と矢継ぎ早に質問しますが、神さまは全てを知っている上でアダムたちに尋ねたのかもしれませんが。

・アダムの「あなたがわたしと共にいるようにしてくださった女が」という答えからは、「責任の一端はあなた(神さま)にある」という思いが透けて見えます。さらに女は、「蛇がだましたので」と、責任を蛇に負わせようとします。

・二人は二つの罪を犯しました。一つは神さまの言いつけに背き、木の実を食べたこと。そして二つ目は、自分の罪を認めずに責任転嫁をしたことです。二つ目の罪がなければ、神さまはそこまで怒ることもなかったのではないかと、思うのはわたしだけでしょいか。

(1月 20日)「創世記 5 : 21~24」

エノクは神と共に歩み、神が取られたのでいなくなった。

(創世記 5 章 24 節)

・アダムから始まる系図に出てくる人々は、「～年生き、そして死んだ」という終わり方をしています。しかしエノクだけは、「神と共に歩み、神が取られたのでいなくなった」と書かれています。

・このため、エノクは神さまの手によって天に引き上げられたのではないかと考えられてきました。列王記下 2 章 11 節の、旧約の預言者エリヤが天に上って行ったという記述が思い起こされます。

・新約聖書にも、エノクに関する記述があります。ユダの手紙 14 節です。「アダムから数えて七代目に当たるエノクも、彼らについてこう預言しました。『見よ、主は数知れない聖なる者たちを引き連れて来られる』。エノクは神に近い存在として考えられていたのでしょうか。

(1月 21日)「創世記 5 : 25~32」

ノアは五百歳になったとき、セム、ハム、ヤフエトをもうけた。

(創世記 5 章 32 節)

・5 章 1 節から始まったアダムの系図は、ノアの代まで進んで終わります。この中で一番長寿なのはメトシェラで、なんと 969 年も生きたそうです。キリスト教が東西分裂してから今までの長い期間、生きてきたようなものです。

・これまで出てきた人たちはみな、高齢で子どもを授かっていました。アダムは 130 歳、セトは 90 歳など。メトシェラでも 187 歳でした。しかしノアだけは 500 歳になってから、子どもが出来たそうです。どうしてここまで遅いのでしょうか。

・後に書かれていますが、ノアが 600 歳のときに洪水が起こります。従って三人の息子は、そのころ 100 歳ということになります。洪水が起こったときには彼ら三人にはまだ、子どもは出来ていませんでした。働き盛りの 100 歳、ということなのでしょう。

(1月18日)「創世記5:1~5」

アダムは百三十歳になったとき、自分に似た、自分にかたどった男の子をもうけた。アダムはその子をセトと名付けた。(創世記5章3節)

・ここからアダムからノアまでの、10代にわたる系図が書かれます。マタイによる福音書の冒頭にも系図が書かれており、ユダヤでは血統を大切にしているのがわかります。ただしマタイ福音書では、系図の始まりはアブラハムとなっています。

・ここでも「神は人を創造された日、神に似せて(新しい聖書では『神の姿に』)これを造られ、男と女に創造された」と強調されています。わたしたちは神の似姿に造られていることを心に留めたいと思います。

・一方でセトは、「自分(アダム)に似た、自分(アダム)にかたどった男の子」と書かれています。元々は神さまの似姿に造られた人間ですが、少しずつ親の欠けた部分を引き継いでいくのでしょうか。何度もコピーをすると、印刷物がだんだん薄れていくように。

(1月19日)「創世記5:6~20」

セトは百五歳になったとき、エノシュをもうけた。セトは、エノシュが生まれた後八百七年生きて、息子や娘をもうけた。セトは九百十二年生き、そして死んだ。(創世記5章6~8節)

・ユダヤでは、神さまの祝福は次のような形であらわされると考えられてきました。子孫を残すこと、財産を得て裕福になること、そして長寿です。そのこともあり、旧約聖書の前半に出てくる人物は、いずれも長寿です。

・アダムは930歳、セトは912歳、エノシュは905歳...と長寿の域をはるかに超えています。1094年に生まれた平安時代後期の公卿、藤原顕頼が2023年の今も生きているようなものです。

・また、かなりの高齢になってから子どもが与えられています。それでも計算上では、アダムはセト、エノシュ、ケナン、マハラエル、イエレド、エノク、メトシェラ、レメクというひひひひひひ孫(言い方があっているかは知りませんが)の誕生に立ち会っていることになりませんが。

(1月12日)「創世記3:14~19」

お前は顔に汗を流してパンを得る 土に返るときまで。お前がそこから取られた土に。塵にすぎないお前は塵に返る。

(創世記3章19節)

・聖書学の用語で「原因譚」という言葉があります。わたしたちの身の周りにある事柄を説明するために、その原因を聖書の物語に遡らせることを言います。今日の箇所の中にも、いくつか登場します。

・なぜ蛇はあんなに気持ち悪い姿で這いまわるのか。なぜ多くの女性は蛇を嫌うのか。なぜ出産は苦痛を伴うのか。なぜ労働はしんどいのか。それらの原因を、聖書の中に見出すのです。さらに人間の罪も、アダムとエバから始まった「原罪」だと理解するのです。

・しかしアダムとエバの罪の結果、人間と神さまとの関係が壊れてしまったということは押さえておきたいと思います。この断絶を修復するために、イエスがわたしたちの間に来てくださったのですから。

(1月13日)「創世記3:20~24」

主なる神は、アダムと女に皮の衣を作って着せられた。

(創世記3章21節)

・新共同訳聖書では、エバという名前の後に(命)という原意(原語の意味)が書かれていましたが、新しい聖書にはそれはありません。もともとの聖書に書かれていないからなのですが、あった方が読みやすいという気もします。

・二人はそれまで、いちじくの葉をつづり合わせ、腰に巻いていました。しかしここで神さまは、皮の衣を作って着せます。恥ずかしさを隠すだけのものを、身体を保護する物へと変えられるのです。

・ここに、神さまの人間に対する思いを見ることができます。確かに樂園からアダムとエバは追放されました。しかし神さまは彼らに皮の衣を着せることで、人間を守っていくという思いを示されたのです。

(1月14日)「創世記4:1~7」

もしお前が正しいのなら、顔を上げられるはずではないか。正しくないなら、罪は戸口で待ち伏せており、お前を求める。お前はそれを支配せねばならない。  
(創世記4章7節)

- ・エバはカインとアベルという兄弟を産みます。子どもが与えられることは神さまの祝福だと考えられていましたから、神さまは追放してもなお、人間を祝福されているということを感じておきたいと思います。
- ・カインは農耕を、アベルは遊牧を生業とします。そしてそれぞれささげ物をささげますが、神さまはアベルの物にのみ目を留められました。アベルの物は「肥えた羊の初子」とわざわざ書いてあるのに対し、カインの物は「土地の実り」としか書かれていません。
- ・アベルが最上の物を厳選して神さまにささげたのに、カインはその辺にある収穫物をささげたから神さまの怒りを買ったのか、それとも他の理由があるのかはわかりません。ともかくカインは神さまに対して怒り、その怒りの矛先は弟アベルに向けられていきます。

(1月15日)「創世記4:8~16」

カインが弟アベルに言葉をかけ、二人が野原に着いたとき、カインは弟アベルを襲って殺した。  
(創世記4章8節)

- ・聖書の時代、農耕民族と遊牧民とは仲が悪かったようです。そのことと関係があるのか分かりませんが、羊を飼うアベルは土を耕すカインによって殺害されました。聖書が描く、人類最初の殺人です。
- ・カインは自分のささげ物が神さまの目に留まらなかったことに怒り、アベルを殺します。アベルは何も悪いことをしていないのに、理不尽な怒りです。しかし人間の怒りは、同じような理不尽と思われるものが多いのも事実です。
- ・神さまはカインを追放しますが、同時にカインにしるしをつけられます。カインを殺す者があれば7倍の復讐を受けるというしるしによって、人がカインに手を出さないようにとされるのです。大きな罪を犯した者をも守られる神さまの寛大さが見て取れます。

(1月16日)「創世記4:17~24」

アダはヤバルを産んだ。ヤバルは、家畜を飼い天幕に住む者の先祖となった。  
(創世記4章20節)

- ・アダムの子カインは弟のアベルを殺害したために、地上をさまよう者となりました。そして妻を迎えます。この時点で地上にはアダム、エバ、カインの3名しかいないはずですが、そういう細かい所は考えないようにしましょう。
- ・カインからエノク、イラド…とその血筋は受け継がれていきました。神さまはカインに対して、その子孫を与えていくという祝福までは奪われなかったようです。
- ・カインの子孫の中から、様々な職業の先祖が生まれていきます。「家畜を飼い天幕に住む者の先祖」であるヤバル、「豎琴や笛を奏でる者すべての先祖」であるユバル。二人の父であるレメクは妻たちに、「わたしは傷の報いに男を殺し 打ち傷の報いに若者を殺す」と言います。何だか物騒です。

(1月17日)「創世記4:25~26」

再び、アダムは妻を知った。彼女は男の子を産み、セトと名付けた。カインがアベルを殺したので、神が彼に代わる子を授け(シャト)られたからである。  
(創世記4章25節)

- ・ルカによる福音書3章23節以降にはイエス様の系図がありますが、そこには「エノシュ、セト、アダム。そして神に至る」(ルカ3:38)と書かれています。カインとアベルの名は、系図から消えています。
- ・「授ける」という意味を持つヘブライ語「シャト」にちなみ、新たに生まれた男の子は「セト」と名付けられます。彼の妻は「セトの花嫁」と呼ばれるのか、と小柳ルミ子を思い出してしまうのは、わたしだけでしょいか。
- ・今日の箇所最後に、「主の御名を呼び始めたのは、この時代のことである」とあります。新しい聖書では、「その頃、人々は主の名を呼び始めた」となっています。人々の間に「信仰」と「礼拝」が生まれてきたということです。